

金閣寺は、金閣寺として建てられた

—「日本国王源道義」こと足利義満と五台山の仏教説話—

湯谷 祐三

—「金閣寺」は俗称・通称なのか？

金閣寺は、その金箔を貼りめぐらした壮麗な姿から、京都の数ある著名寺院の中でも、とりわけ一般的によく知られた寺院と言えよう。ところで、この「金閣寺」という名称については、それはあくまでも通称名であって、正式には鹿苑寺といい、通常「金閣寺」と呼ばれる金箔を貼った建物は鹿苑寺の舍利殿なのだ、という説明にしばしば接する。

例えば、「金閣寺は正式名称を鹿苑寺という。金閣寺の名が広く用いられるようになるのは、意外に新しく江戸時代になってからのことである」とされること¹である。

「金閣寺」なる名称は江戸期以降の「俗称」「通称」なのだという、この種の記述は一書に限らず、およそ近代以降の金閣寺（鹿苑寺）の沿革を述べる文献においては、まず冒頭から、金閣寺という名称が「俗称」「通称」である、とまるで約束事のように繰り返し述べられてきた。

しかし、一方で、鹿苑寺という寺号は、創建者たる室町幕府第三代將軍足利義満の死後名付けられた名称であり、その初見は応永二十九年であることから²、文献の上では、応永十五年の義満の死より十四年も経過してから現れるものであつて、たとえ義満の法号（鹿苑院）にちなんだ命名ではあつても、創建者義満の意向を直接反映した寺号とは言えないであらう。

この「北山殿」とも「北山第」とも呼ばれた、衣笠山東北の広大な義満の邸宅には、現在「金閣」と呼ばれる舍利殿を初めとして、護摩堂・懺法堂・看雪亭（七仏薬師を安置）などの仏堂が林立していたのであり³、特に舍利殿はその名の通り、仏舍利を安置するという仏教上重要な堂舎である。

釈迦の遺骨である舍利を祀り、多くの仏堂群を有するというのは、それは明らかに「寺院」の結構であり、在家人の私邸の呼称たる「北山殿」という名称のみで、これらの仏堂群を総称していたというのは、いささか奇異な思いを抱かざるを得ない。

現に、「北山殿」の前身である、鎌倉期の藤原公経によつて創建された別業「北山第」の中の仏堂群は「西園寺」という寺号を有しており、この名称にちなんで、公経の家系を西園寺家と通称するようにもなっている。

応永四年（一三九七）、多数の堂舎が点在していた旧西園寺の所在地に、面目を一新する仏堂群を建造するにあつて、自身その二年前の応永二年に出家して、既に僧侶の身分を取得していた義満が、寺号の必要性を全く認識していなかったとは考えにくいのである。

やはり義満は、この北山殿を寺院としても考えていたのではあるまいか、そして寺院としての性格があるとすれば、当然何らかの寺号があつたとみるべきではないか。

本稿では、これまで金閣寺の創建と結びつけて考えられることのなかった中国五台山を舞台にした寺院創建説話を手掛かりとして、応永九年（一四〇二）二月に明の建文帝より「日本国王源道義」の呼称を得るに至った足利義

満の、金閣寺造営に込められた宗教的・政治的構想を探りたいと思う。

二 「金閣寺」を夢見た二人の「道義」

足利義満は応永二年（一三九五）六月二十日に、三十八歳で出家した。この出家直前の義満の動きは慌ただしい。出家の約半年前、応永元年十二月十七日には武士の棟梁たる征夷大將軍を辞して、その子義持を跡に据え、そのわずか八日後の同月二十五日には、太政大臣に任ぜられたが、歳改まって半年後、出家の二十日前の六月一日には、これも辞している。そして同月二十日、出家に至った。

実は、太政大臣辞任以前に既に出家の意向を周囲に漏らしていたとおぼしく、その動きを察知した後小松天皇は四月二十二日に思いとどまらせるべく室町第に行幸している。

征夷大將軍・太政大臣という、武家・公家の頂点を極めたタイトルを弊履のごとく脱ぎ捨てて出家した義満であるが、しかしそれは仏道修行に邁進するといった殊勝なものではなく、以前にも増して「法皇」のごとき自身に政治権力を集中させ、武家・公家、そして天皇をも凌駕する、「院政」と類似した政治体制を構築する意図より出たものであることは、既に諸家の指摘されるところである。そのための舞台として、出家の二年後に造営が開始されたのが北山殿である。

北山殿の宗教的・政治的機能については、次章以降検討することとして、ここでは、義満の出家をめぐる基本的な疑問を一つ提起したい。それは彼の法名についてである。

義満は、出家以前から「天山」なる道号と「道有」なる法号を既に持っており、収集した書画の数々に「天山」や「道有」の方形印を捺していることは、伝来するそれらの作品から広く知られている⁴。

そして、出家の約五ヶ月後、十一月十四日付けの書状（宛名は無いが、青蓮院尊道親王宛と考証されている）に

は、明らかに「道有」と署名していることから⁵、義満は出家時既に持っていた法名「道有」をそのまま使用していたことがわかるのだが、何故か、それから約一ヶ月後の一条経嗣の日記『荒暦』同年十二月二十一日条によれば、梶井門跡宛の文書に、義満は「道義」なる名前を書いたという。

このことから、白井信義氏は、義満の「道有」から「道義」への、「改名はその間すなわち十一月から十二月に至る一ヶ月の間にある筈である」とされるのであるが⁶、問題は、収集書画の落款に盛んに使用するほど愛着を持っており、出家後もそのまま使用していたはずの「道有」という法名を、義満は何故急に「道義」に改めたのかという点である。

これについて、白井氏は「改名の事情は詳かでない」とされるのみ。また、義満の「王権篡奪計画」説で知られる今谷明氏も、出家の理由について、「自由な」身分にみずからを置くため」とされるのみで⁷、「道義」という法名の意味については何も述べられない。近年、中国思想史の立場から義満の行動を再検証されている小島毅氏も、「義満は出家し道義と名乗った」とされるだけである⁸。

およそ、足利義満を取り上げた研究において、応永九年二月六日付の明国から義満への返詔に記された「日本国王源道義」という呼称に言及しないものは少ないだろう。「王権篡奪計画」説の提起以降、更にこの呼称への注目は高まっていると言ってもよい。それにもかかわらず、義満の「道有」から「道義」への急な改名の理由、その法名「道義」の意味するものに着目した考察は全く見当らなかつた。

「日本国王源道義」なる呼称は、実に奇妙な呼び名である。「道義」が通常意味するところの法名であるなら、出家した義満の姓は「积氏」「沙門」であるはずで、俗姓「源氏」を名乗ることはおかしい。一方、俗姓「源氏」を名乗り続けるなら、何故本名の義満を名乗らないのか。

康暦二年（一三八〇）、当時二十三歳の義満は、「征夷大将军源義満」として、「丞相に捧ぐる書」を使いを持たせ

て明に入貢させた。しかし、明はこれが皇帝に宛てたものでなく、「征夷大將軍」という肩書きも、天皇に臣従するものとして、義満を日本の統治者と認めず、入貢を拒んだ。

それから二十一年、武家・公家の頂点を極め、名実ともに日本の最高権力者となった義満は、「日本准三后道義」と名乗り、「書を大明皇帝陛下に上る」と始まり「道義誠惶誠恐頓首」で終わる上表文を明に送った。この時、何故「准三后義満」と書かなかったのか。

義満の行動に意味のないものは一つもなく、すべて自身の当面の目的に合致した行動を取るを考えれば、本名「義満」を名乗らず、「道義」を名乗ったのは、その方が、中国から「日本国王」の称号を獲得するのに有利である、と義満自身が考えたからに他ならない。では何故「道義」という名前が、本名義満よりも明に対して意味があるのであろうか。

それは、義満を遡ること六百五十年あまり前、中国における文殊信仰の霊地として著名な五台山を巡礼し、「金閣寺」を夢見た僧「道義」が玄宗治下の唐に存在したからであり、義満の法名「道義」は、この一介の巡礼僧「道義」に由来する、と筆者は考えている。

五台山金閣寺の創建説話は、北宋の『宋高僧伝』や南宋の『広清涼伝』といった、比較的ポピュラーな文献資料に記載されているもので、決して新出資料というわけではないのだが、これまで足利義満の金閣寺創建と関連づけて論じられたことは、管見の限り皆無であった。初めに記事の分量の少ない『宋高僧伝』の全文を掲げる。説明の便宜上、三段に分節して示す。

唐五台山清涼寺道義伝

〔A〕 釈道義。江東衢州人也。開元中至台山於清涼寺粥院居止。典座普請運柴負重登高。頗有難色。義將竹鞋

一輛輒貿人荷擔。因披三事^(四)納衣。東北而行可五里。

〔B〕 來於楞伽山下逢一老僧。其貌古陋引一童子。名字覺一。老僧前行。童子呼請義東辺寺内啜茶去。乃相隨入寺遍礼諸院。見大閣三層上下九間総如金色閃爍其目。

〔C〕 老僧令遣義早還所止。山寒難住。唯諾辞出寺。行及百步迴顧唯是山林。乃知化寺也。却回長安。大曆元載具此事由奏宝応元聖文武皇帝。蒙勅置金閣寺。宣十節度助緣。遂召蓋造都料。一僧名純陀。為度土木造金閣一寺。陀元是西域那爛陀寺喜鵲院僧。寺成後勅賜不空三藏焉。義不測其終。『宋高僧伝』卷第二十一(大正藏

五十卷)

Aでは、衢州(現浙江省)の道義なる僧が、玄宗の開元年中(七一三〜七四一)に五台山清涼寺の粥院(巡礼者に宿と食を提供する施設か)に止宿したことを述べる。典座の普請の作業を手伝った後、袈裟を身につけて東北の方角へ向かった。

Bでは、道義が楞伽山下で童子を連れた老僧に出逢い、その後について行って、金色に輝く上下九間の三層の大閣を拝観したことを述べる。

Cでは、老僧より早く帰るよう言われた道義が帰途につき、振り返ると、既に金色の寺はなかったことを述べる。道義は長安に行き、代宗の大暦元年(七六六年)、皇帝に自分の見聞を奏上し、勅を蒙って金閣寺を建てた。この寺の造営には十の節度使が助力し、西域那蘭陀寺の純陀も土木工事に加わった。寺ができると皇帝はこれを不空三蔵に賜った。道義については、その最後のことはわからないという。

以上のように、この説話に記される「道義」「金閣」「三層」という三つの要素すべてが、道義と改名した足利義満の金閣寺造営と符号している点、すこぶる興味深い。

更に、この説話は南宋の『広清涼伝』にも記載されており、こちらは、『宋高僧伝』に比べて記事分量が多い。よって、両者の関係を明らかにするため、『宋高僧伝』に対応する部分のみを抄出して示す。傍線部が『宋高僧伝』と同一文関係にある文章である。

道義和尚入化金閣寺十五

〔A〕 积義禪師者。未詳姓氏。本江東人也。受業於衢州龍興寺。神清骨秀。風標彩人。唐開元二十四年四月二十三日。遠自江表。与杭州僧普守。同遊至台山清涼寺粥院安止。有主事僧白。普請於東嶺荷薪。道義。即以竹鞋一兩。雇人代行。遂披三事衲衣。東北而行。訪尋文殊所在。(中略一)

〔B〕 因出僧堂南。約數十步。翹首瞻望。忽見一童子。年十三四。衣新黄衫。履新麻屨。自称覺一。云和尚在金閣寺。遣來屈衢州道義閣梨喫茶。義遽隨覺一。向東北行。一三百步。举目見一金橋。義即隨登。乃金閣寺。三門樓閣。金色晃曜奪目。大閣三層。上下九間。觀之驚異。虔心設礼。遂入寺庭。堂殿廊廡。皆金宝間飾。独当門大樓。及所度橋。純以紫磨真金成之。義瞻仰不暇。神志若失。唯竭誠展礼。童子引義入東廂。從南第一院登門。(中略二)

〔C〕 義巡謁畢。老僧遣義早歸。寒山難住。道義遂辭老僧。出寺百步。迴顧已失所在。但空山喬木而已。方知化寺。遂迴長安。大曆元年。列其上事。聞奏太宗皇帝。帝下勅建置。詔十節度使照修創焉。『廣清涼傳』卷中

(大正藏五十一卷)

傍線部を比較して明らかのように、『宋高僧伝』の記事は、ほぼすべて『広清涼伝』の記事に含まれているのであり、前掲『宋高僧伝』の独自記事としては前掲Cの末尾の傍線部のみである。この傍線部の記事は後述する『不空

三蔵表制集』から得た情報である。

つまり、『宋高僧伝』は『広清涼伝』の記事を抄出して、末尾に『表制集』の情報をつ加したような形なのであるが、両者の編纂年次から言えば、前者は北宋、後者は南宋であるから、前者が後者を抄出することはあり得ない。よって、ある共通の典拠資料を両者それぞれが独立して参照し、『宋高僧伝』はかなり簡略化して引用、『広清涼伝』は比較的詳細に引用したのではないかと、一応は考えられる。

それでは、『広清涼伝』の記事とその他の特徴を見てゆくが、まず目に付くのは、『宋高僧伝』に比べて、記事が詳細であるということである。道義の出自についても、衢州龍興寺で僧侶としての修行をしたと出身寺院の名を明記し、五台山巡礼の年次についても、『宋高僧伝』が「開元中」と漠然としているのに対して、「開元二十四年四月二十三日」と、年月日を詳細に記している。また、中略した部分の記事は、『宋高僧伝』には全く見られないものである。

しかし、足利義満の金閣寺造営との関係で、何よりも看過できないのは、『広清涼伝』Bの二重傍線を引いた箇所である。即ち、不思議な老僧の後に従った道義が目あげると、そこには「金橋」があり、それを渡って、道義は金閣寺の門前に立ったという。この「金橋」の記述は、『宋高僧伝』には全く見られず、『広清涼伝』の独自記事なのであるが、「金橋」と言えば、どうしても次の事柄を想起せずにはいられない。

創建当時の義満の北山殿の建物の様子を知るための資料として、必ず引用される『臥雲日件録跋尤』（瑞谿周鳳の日記を惟高妙安が抄録したもの）の文安五年（一四四八）八月十九日条には、「舍利殿北、有^二天鏡閣^一、複道与^二舍利殿^一相通、往来者似^レ歩^レ虚^一」とある。

舍利殿、即ち金閣の北側に天鏡閣なる建物があり、「複道」にて舍利殿と通じており、これを往来するものは、まるで虚空を歩むような気持ちをしたという。「複道」とは「上と下とを往来しうるように二重に設けた通路。二重廊下」（広辞苑第五版）ということだが、文意から推察するに、一種の空中架橋というべきものであろう。

この記事に続いて、「閣曾為^二南禪方丈閣^一、而去歲回祿為^二灰燼^一、可^レ惜」と記すように、瑞谿周鳳が座頭の最一檢校より話を聞いて、この記事を記録したのは、義満没後四十年が経過し、既に南禪寺の方丈閣として移築されていた天鏡閣が、更にまた「灰燼」に帰した後のことなのである。

当然、その時には、天鏡閣と舍利殿とを連結していたという「複道」は影も形もなかったはずだ。それにもかかわらず、瑞谿に往時の舍利殿の様子を語った最一檢校が、まず第一に想起したのが、この「複道」であったということは、この空中架橋の印象が余程強く脳裏に残っていたことの証左とすべきであろう¹⁰。

このことから、舍利殿と天鏡閣を結ぶ「複道」は、創建時の舍利殿、即ち金閣の外観のなかでも、とりわけ重要な建築的特徴であったことがわかる。そのような「複道」の取り付けに当たっては、施主たる義満の意向が強く働いていたに違いない。

もう明らかなように、橋を通過して金閣寺に至るといふ義満の構想は、唯一「金橋」の存在を記す『広清涼伝』の道義伝に基づくものなのである。義満は、『広清涼伝』所収の僧道義の伝記を見聞し、新造する舍利殿の着想を得て、それを忠実に再現したと考えられる。

義満に対する道義伝の影響は、建築物に対してだけではない。彼が既に有していた「道有」なる法名をわざわざ「道義」に変更したのも、五台山金閣寺を発願したのが僧道義であるからである。

義満没後の資料であるが、『臥雲日件録抜尤』文安五年四月十八日条には、義満が北山に居たところ、かつて北山に苦行者がおり、義満はその転生であるという話がなされていたという¹¹。このような「転生」の話題は当時の禅僧間で大変好まれた話柄であった。おそらく、義満は、龍湫周沢あるいは義堂周信あたりから、『広清涼伝』の道義伝を聴聞し、自身を五台山の巡礼僧道義の「再来」「転生」に擬していたのであろう、と筆者は考えている¹²。

もちろん、義満が自身を巡礼僧道義に擬していることを明に対して喧伝したなどという記録や、義満が道義の

「転生」であることを明の皇帝が特別に賞したというような記録は全く残されていない（そうしたものがあれば既に先学によって指摘されたはずである）。義満を「日本国王」と認める明の皇帝の判断は、あくまでも、日本からもたらされる日本国内の実際の政治状況を踏まえてなされたものである。

しかし、朝貢貿易の実務を司る使者が禅僧であることを考慮すれば、彼らが明側との接触に際して、義満の「道義転生説」などを話題の一つとして持ち出し、相手の興味を引いた可能性は十分あると筆者は推定している。

以上見てきたように、応永四年の北山殿造営開始当初から、既に金閣寺という名称が、義満の舍利殿設計構想の根底にあったのである。金箔を貼った結果として、金閣寺になったのではない。よしんば、金箔を貼るに至らなかつたとしても、義満の構想した舍利殿は金閣寺なのである。義満は僧道義として発願した金閣寺を、名実共に金閣寺たらしめるために金箔を貼った。金閣寺は、はじめから金閣寺として建てられたのである。

それにしても、数ある五台山の縁起説話の中で、義満が特に道義伝にかくも深く触発されたのは何故か。義満の文殊信仰とは如何なるものであったのか。それらのことを考える前に、五台山金閣寺の実際の造営過程を見ておく必要がある。

三 五台山金閣寺の性格―王権と密教の相依関係―

『広清涼伝』の道義伝では、開元二十四年（七三六）に五台山の山中巡拝を開始した僧道義が金閣寺の姿を目の当たりにして感激し、大暦元年（七六六）に「太宗」（代宗のことか）に、そのことを奏上して、金閣寺建造の勅が下ったことになっている。

しかし、「化寺」の姿を見てから奏上するまでに三十年を要するというのは、いささか長すぎる。それに、一介の巡礼僧である道義が、皇帝に奏上するというにも、にわかに信じ難い。

実際の五台山金閣寺建立の経緯はもう少し複雑であった。それを記録するのが、不空三蔵による代宗への上表文を集録した『代宗朝贈司空大弁正広智三蔵和上表制集』（大正蔵五十二卷所収、以下『表制集』と略称する）巻第二に収められた「請捨衣鉢助僧道環修金閣寺 制一首」である。その内容を略述すれば、次のようになる。

大興善寺の不空三蔵が五台山の金閣寺について奏上するには、この寺の額は先聖（玄宗あるいは肅宗であろう）皇帝が既にして書かれておかれたが、未だに堂宇が完成していないという。即ち、開元二十四年に衢州僧道義は五台山にて金閣院と号する「文殊聖迹寺」を見た。それは十三間の大きさで万人余りの僧衆がおり、すべて金で造られていた。道義がその様子を図画して長安に持ち込み披露すると、天下の人は皆、金閣寺を造りたいと思った。

そこで、澤州（太原の付近）の僧道環に供養を持たせて五台山に送ると、道環は道義禪師の跡を慕い、国家のために金閣寺を造ろうと発願した。伽藍はすべて道義の所見のように造りたいと考えた。今夏（永泰二年＝大暦元年）、着工したが費用はすべて自弁している。まさに先聖皇帝の書額と道義の感通とを實現しようとしており、その志は小さなものではない。五台山の額は五つあり、清涼・華嚴・仏光・玉花の四ヶ寺は既に完成しているが、ひとり金閣寺だけは堂宇が整っていない…。

これによれば、開元二十四年に巡礼僧道義は自分の幻視した金閣寺の様子を絵に描いて長安で公開したことがわかる。それによって、金閣寺建立の世論が醸成し、五台山に派遣された僧道環は、自ら費用を工面して道義の夢を實現しようと発願した。

以後、道環は建築費の浄財を勧進していたと思しく、三十年が経過してある程度の費用が集まったのであろう、大暦元年にいよいよ造営に着手したのであるが、この事業に目をつけたのが、当時長安で密教を宣揚していた不空三蔵であり、自身も助力を表明するのみならず、文殊の聖迹である金閣を造るのは陛下しかいない、と強く代宗皇帝の関与を促し、更に、この事業は皇帝と臣下との協力によって成し遂げられてこそ大きな意味があると、皇

帝と官僚の一味同心を求めた。それは言外に国家費用の多大な抛出を意味したのであろう。

この不空三蔵の奏上を取り次いだのが、当時権力の中枢にあった元載・杜鴻漸・王縉の三人で、奏上に示された不空の希望は彼らの望むところとも合致していたのである。

『旧唐書』卷一一八列伝第六八の王縉伝には、彼ら三人が代宗に熱烈な仏教信仰を植え付け、遂には宮中において仏像を安置して法会を行う「内道場」の設置にまで至ったこと、そうした仏教偏重の結果、僧侶の乱行が横行して社会的損害を招いたことなどについての批判的な記述があり、それに続いて、問題の金閣寺造営について次のように記す。

五台山有金閣寺、鑄銅為瓦、塗金於上、照耀山谷、計錢巨億万。縉為宰相、給中書符牒、令台山僧數十人分行郡県、聚徒講説、以求貨利。(後略)

このことから、五台山金閣寺は、その創建当初、銅の瓦の上に実際に塗金が施されて、山中に燦然と光り輝いていたことがわかる。王縉はそれらの費用をまかなうために、五台山の僧侶を各地の郡県に派遣して講説せしめ、淨財を求めたという。

さて、このようにしてできあがった金閣寺において、不空三蔵は如何なる仏教信仰を実践したのか。実は、代宗と不空三蔵の關係は、中唐期における王権と密教の相依關係を示す典型例として、中国史・中国仏教史の分野では既に注目され、研究の蓄積をみる事柄であった。

不空三蔵は、金閣寺造営以前から、「代宗を金輪聖王であると同時に一字仏頂輪王とみなしたと考えることが可能であろう」とされるように¹³、代宗をして、大日如来の聖王化ともいべき一字仏頂輪王に擬していたことがわか

るが、国を挙げて造営した金閣寺にも、不空の鼓吹する密教色の強い仏像群が安置されていたことを、ある日本の巡礼僧が記録していた。

開成五年（八四〇）七月二日に金閣寺に参詣した日本僧円仁の『入唐求法巡礼行記』第三卷によれば、金閣寺の第一層には青毛の獅子に騎馬した金色の文殊菩薩像、第二層には天竺那蘭陀寺の様式によるという金剛頂瑜伽の五仏、第三層には頂輪王瑜伽会の五仏の金像が安置しており、壁面には未彩色の諸尊曼荼羅が描いてあったという¹⁴。

ここで、不空三蔵とその師である金剛智によって中国にもたらされた、密教化した文殊菩薩である「五字文殊」の頭頂の「五髻」が、「阿闍・宝生・無量寿・不空成就・毘盧舍那」の五仏に対応するという指摘を踏まえれば¹⁵、これらの五仏が金閣寺第二層の五仏とすべて一致することによって、第一層に安置される文殊菩薩像が、『華嚴経』等の通常の大乗經典に説かれる従来の文殊菩薩像ではなく、不空が新たに導入した「五字文殊」であることが判明する。

更に、第二層の中尊毘盧舍那仏の宝冠に描かれた五仏が、中尊一字仏頂輪王以下、すべて第三層の五仏と一致することから、第三層もまた第二層から「頂生」したものであり、総じて、五台山金閣寺は「それ自体一字仏頂輪王曼荼羅と考えられるのである」¹⁶。

筆者の理解するところ、不空三蔵は、「五字文殊」↓「毘盧舍那仏」↓「二字仏頂輪王（＝代宗）」という密教独特の仏の生成論理を使って、代宗の王権に密教的権威を付与し、五台山に従来から存在していた文殊信仰の密教化を企図したのであり、その象徴的建造物が金閣寺そのものでなのである。

よって、五台山と言えば文殊信仰という通念は、それはそれで間違っていないものの、少なくとも金閣寺を拠点に不空三蔵が推進した文殊信仰とは、密教論理によって新たに再編成されたものと言えよう。

そうした五台山金閣寺造営をめぐる宗教思想は、北山殿に金閣寺造営を果たした義満の宗教的意図にも大きな影

響を与えた、と筆者は考える。

北山殿における宗教行為として、従来より指摘されているのが、「廻祈祷」と称される月例の密教修法の実施であった。その始まりは、応永六年五月十二日の大六字法とされ（この時、同時に泰山府君祭も実施）、以後応永十五年の義満逝去まで続けられていくが、十二月分すべての修法名の判明する応永十一年の分を列挙すれば次の通りである。

尊星王法（一月）・金剛童子法（二月）・如法般若法（三月）・文殊八字法（四月）・仁王経法（五月）・五壇法（六月）・一字金輪法（七月）・大六字法（八月）・尊勝法（九月）・法華法（十月）・如法不動法（十一月）・金剛宝珠法（十二月）

即ち、「義満は初めは義堂周信や太清宗謂等によって禅宗的教養を積んだのであるが、この頃ではまったく密教の修法に専念し、その出入にもこれら密教僧侶が追従しているのである」と白井氏が指摘される所以である¹⁷。

但し、筆者は、義満が禅宗から密教に宗旨替えしたなどとは考えていない。義満の仏教修学の実際は、一宗に偏った専門知識を身につけ、その宗派の僧侶になるというようなものではなく、世俗の権力の最高地点を目指す自身の、その時その時の興味と目的に応じて周囲の各宗の僧侶から法話を聞き、取り入れるべき考えは取り入れ、行うべき行法は行うといった、どこまでも実質本位のものであった。

前述の月例修法の日には、同時に「天曹地府祭」や「泰山府君祭」「三万六千神祭」といった道教的儀礼が併修されていることからわかるように、自己の目的を実現するためであれば、義満は仏教・道教など特定の思想に拘るものではない。

この場合、密教思想を根幹とする五台山金閣寺をモデルとして北山殿の中心となる金閣を構想したが故に、北山殿においては個人的な座禪修養ではなく、密教修法が中心として執り行われるのは至極当然と言わざるを得ない。

義満は上述のごとき、様々な密教修法を実践することによって、自身の護持と国家の安寧、即ち王権の全きことを祈禱していた。義満が自身の宗教的人格を形成するに際しては、最初に金色に輝く三層金閣のビジョンを夢想した巡礼僧道義のイメージ、更に国家権力の導入により金色の金閣寺の造営に成功した唐代密教の立役者たる不空三蔵のイメージ、更には、不空の教えを取り入れて一字金輪聖王と一体化した代宗皇帝のイメージ、これら三者の性格を兼ね備えて、渾然一体となったような人格を、義満は自身に付与したと思われる。

そして、創建時の金閣の第三層には、仏舍利以外、何の仏像も安置されていなかったと推定できることを踏まえれば¹⁸、義満は、不空三蔵の教えよろしく、金閣寺第三層に泰然と坐した自分自身を、仏法と王法の両者を統帥する一字仏頂輪王に擬していたのではないかと考えられるのである¹⁹。

四 「花の御所」と「金閣寺」——義満による西園寺家の接收（一）

義満の金閣寺が、中国五台山の金閣寺に想を得て造営され、そこには密教的王権思想が組み込まれていたことが明らかになったが、このことを手がかりとして、義満の他の行動を再検討してみると、いくつかの新しい観点が見えてくる。まずは「花の御所」という、文字通り何とも華やいだネーミングで通称される建物について考えてみたい。義満は父義詮の三条坊門邸に居住していたが、北小路室町に造営した新邸に、二十一歳の永和四年（一三七八）三月十日に移り住んだ。この新邸こそ、室町殿とも呼ばれ、花の御所とも呼ばれる將軍邸なのであるが、川上貢氏によれば、その敷地は、「西園寺実兼の第四子兼季を始祖とする菊亭家と公経の第四子実藤を始祖とする室町家の邸が隣接して設けられていた」場所であった²⁰。この二つの邸宅は、いくつかの変遷を経て、後に崇光院の御所とな

り仙洞とも称されていたが、永和三年（一三七七）に付近の火災により焼失した。

義満は、室町家の邸宅を一時父義詮が買得していたことを理由に、その南に隣接する菊亭跡地共々、焼失後素早く入手して新邸を造営した。室町家の邸宅跡地のそれは花亭、菊亭跡地のそれは下亭または下宿所と呼ばれ、のちに両者あわせて花の御所と呼ばれるようになったとされる。

義満は、この新邸に鴨川の水を引いて池を造り、庭には様々な花木を植えたというのであるが、注目すべきは、この室町家の邸宅跡地には、義満が買得する以前から、既に「花御所」という名称があったのだと、『後愚昧記』の記述などを根拠として²¹、川上氏が考証されていることである。

つまり、俗に言うように、義満が室町殿を造立し、多くの名花を植したところから同邸を花御所と呼ぶようになったのではなくて義満が造立する以前に、既に仙洞地に花御所の呼称が存在していたことがわかる²²。

義満は西園寺一族の邸宅跡地二ヶ所を接収して新邸を造営し、同所は「花の御所」と言われるようになったが、ここはもともと「花御所」などと呼ばれていたのであり、義満は「花御所」を実際に「花御所」たらしめるべく、様々な花卉を移植したのだと言える。

このことは本稿で明らかにした金閣寺の成立と全く似通っている。前述のように、『広清涼伝』に記された金色に輝く金閣寺というイメージと名称が先に存在し、それを眼前に実現するために、義満は新造の舍利殿に金箔を貼って荘厳したのであった。

こうしてみると、義満の建築造営行為というものは、気まぐれに建物を造り、それを華美に飾り立てた結果、通称・俗称が付けられるという、一般にそう思いこまれているような過程ではなく、「花御所」「金閣寺」に象徴され

る「花」や「金」といった美的な言葉が喚起するイメージに義満は敏感に反応し、そのイメージを余すところなく現世に実現させ可視化するための営為として建築が実行されていたことがわかる。

どうやら、花御所と金閣寺の造営は、義満の中では一対の行動であったと考えられるのであるが、それならば両者に共通する要素は何か。それは、両者共にかつて西園寺家が所有した土地であったということである。

西園寺家とは、九条師輔の子で太政大臣となった閑院公季より五代の孫、通季を初祖として、公通・実宗・公経と嗣子継承されるが、実質的には、源頼朝の妹婿である一条能保の娘全子を妻に迎えた公経が、承久の乱を幕府方に急報したことなどにより、乱後の朝廷において幕府の意向を代表する地位を確立し、鎌倉幕府の権力を背景に大きな権勢を獲得したことに始まるといつてよい。公経が後に北山の地を入手して園地と堂舎を造営し、寺号を西園寺としたことが家の呼称ともなった。それが義満の金閣寺の前身であることは周知の通りである。

この公経が、十萬貫に及ぶ大量の宋銭や、多くの唐物・珍獣などを輸入していたことは、『故一品記』仁治三年七月四日条によってよく知られているが²³、実はその記事に続いて、「入道相国真木嶋被立花亭事」とあることが注目される。

即ち、公経は、大量の宋銭を入手した奇しくも同日に、宇治の槇島に別業「花亭」を営んでいたのであるが、この槇島の「花亭」こそ、後に烏丸今出川に造営され「花御所」の呼称を獲得するに至り、義満によって接収されて室町殿の北半分ともなった建物の先蹤ではないか、と筆者は考えている。「花亭」という呼称は、西園寺家において代々踏襲されるがごとき特別な名称ではなかったかと思うのである。

宋銭の大量輸入の記事と同日に、槇島花亭造営の記事が併記されるのも、故無きことではない。なぜなら、宇治川の京都への入り口に当たる槇島は、大坂方面からの物資を積み込んだ船の着岸所だからである。つまり「花亭」は単なる遊樂の地ではなく、西園寺に莫大な富をもたらすであろう国内外からの物資の到着地点に意図的に営まれて

いたと考えられる²⁴。

こうした中国からの宋銭や唐物の輸入、あるいは交易物資流通の掌握という公経の行為は、他ならぬ足利義満が、自身再開させた中国との貿易において、明銭（実は宋銭が主体とされる）や唐物を大量に輸入していたことを直ちに想起させる。

そもそも、二十三歳の時に「征夷大將軍源義満」と名乗って、明から入貢を拒絶されて以来、北山殿造営で頂点を迎える義満の一連の示威行動の直接的動機の一つは、中国から日本の支配者（「日本国王」）として認知されることとであり、日本からの朝貢という形式による交易を再開することであった。更に、その交易の主要な目的は、中国の銭や文物を輸入することにより得られる経済的利益なのである²⁵。

槇島に造営された「花亭」の後身と思しき「花御所」といい、旧西園寺北山殿の造営といい、中国貿易の振興といい、このようにしてみると、義満の行動は、西園寺家、就中その家系の実質的な祖である藤原公経の足跡を着実にたどりつつ、それを更に大規模なものに展開させていったというべきものである。

金閣の北側にあり、空中架橋で金閣と連結されていたという前述の天鏡閣は、義満の創建にかかるものではなく、旧西園寺時代から存在し、花園天皇などがしばしば訪れてそこからの雪景色を觀賞した「二階」に相当する建物であろうという推定が赤松俊秀氏によりなされている²⁶。

義満生涯の盛儀である、応永一五年三月八日から二十八日にかけての、実に二十日間という長期にわたる後小松天皇の北山殿行幸において、十日目に猿楽道阿弥の「舞ヲトリ」が披露された「奥御会所」が、他ならぬこの天鏡閣であろうとは川上貢氏の推定であり²⁷、その東西座敷は多くの唐物や財宝で飾られていた（『北山殿行幸記』²⁸）。

西園寺家自慢の二層の楼閣をそのまま保存して唐物で満たし、その真南にそれより高い三層の金閣を造営して空中架橋で連結するという構造には、西園寺の文化を継承しつつ、それを遙かに凌駕せんとする義満の強い意図があ

ると考えられるのである。

五 義満と源氏物語―義満による西園寺家の接收(二)

西園寺公経に着目すると、もう一つ、近年義満の行動の特徴として指摘されている、ある現象との関連が思い浮かぶ。それは、義満の行動や主催する儀礼の形式に、『源氏物語』とその主人公光源氏との類似性が認められるという事柄である。²⁹⁾

本稿の興味から見ると、まず、藤原公経が夢見によって光源氏ゆかりの北山の地を入手し、西園寺を営んだという伝承(『増鏡』第五「内野の雪」)の背景には、公経自身の祖たる閑院太政大臣公季の北山行きの説話があると推定し、その説話が『源氏物語』における光源氏北山籠もりの典拠であるという認識を、公経自身が持っていたとする。今西祐一郎氏の指摘は誠に興味深く³⁰⁾、そうであれば、公経の思想と行動の完全なる吸収を指向するがごとき義満が、自身の行動を『源氏物語』に範を取って演出することも十分に理解できる。

その光源氏の北山籠もりを主題とする『源氏物語』「若紫」の巻における、北山の僧都から光源氏に贈られた「優曇華の花待ち得たる心地して深山桜に目こそうつらね」という歌に着目した河添房江氏は、「優曇華」が金輪聖王の出現の瑞兆であるとする『河海抄』の記述を手がかりとして、北山の地において光源氏が金輪聖王にたとえられていることを指摘されたが³¹⁾このことは、北山殿金閣に込められた密教思想から、義満が自身を一字仏頂輪王(金輪聖王と同義)に擬していたと考える本稿の趣旨とよく符号する。義満は、北山という地にゆかりをもつ西園寺家の説話や光源氏・金輪聖王といった諸々のイメージをすべてあますところなく自身に取り込んでいたのである。

なお、義満の実母紀良子は順徳天皇四世の孫にあたり、義満自身に天皇家の血が流れていることについては、義満の皇位篡奪説への批判からか、「そもそも順徳天皇の血筋など、皇位継承のうえではほとんど問題にならない存在

であった³²」と、これを軽視するのが最近の通説のようであるが、先程の閑院流公季の母が村上天皇の皇女であることや、光源氏が天皇の子供であることなどを考えると、義満が自身を光源氏的なもので彩るに当たって、「皇統」の血を全く意識しなかったとは、やはり考えにくい。

「花御所」の造営や、金閣に象徴される北山殿の全面的な再構築、銅銭や唐物の大量輸入、源氏物語に範を取った自身の行動の演出と記録、皇統への意識など、従来、義満の様々な行動の様態として指摘されてきたことの数々が、西園寺公経の行動の模倣という観点に立てば、すべて一元的に説明できるのである。

さてここで、義満が五台山金閣寺に着目したことについても、ただやみくもに「金」のもつ豪華なイメージに魅了されたのではなく、これも西園寺家の信仰と関わりがあると推定できることを述べておきたい。

西園寺は不動堂や愛染堂などの密教的堂舎も具備しているが、寺院としての中心となるのは巨大な丈六の定印阿彌陀如来坐像と脇士の観音・勢至菩薩、そして来迎する二十五菩薩の諸像を安置した本堂であろう。つまり、西園寺の宗教的基調をなすものは、藤原頼通の宇治平等院と同様に、阿彌陀浄土信仰なのである（西園寺内の諸堂の配置は『増鏡』第五「内野の雪」を参照）。

ところで、西園寺はその院号を竹林院といい、公経の曾孫実兼の子公衡は「竹林院入道左大臣殿」と呼ばれているが（『徒然草』第八二段）、この院号について筆者は、九世紀中頃の慈覚大師円仁による将来以来、その寺で行われていた称名念仏の声明である「五会念仏」が日本の天台声明の源流となったことでも知られる、五台山竹林寺に由来するものではないかと考えている。

さらに、公経の孫である公相の娘今出川女院嬉子（亀山中宮）とその妹相子（後深草院妾）の姉妹は、日本における五台山信仰の中心地とも言うべき嵯峨の釈迦堂清涼寺内にあった竹林寺において、当麻曼陀羅（浄土変相図）の講賛を主体とした五十日にも及ぶ大規模な逆修を催しており、その全貌をうかがう記録が残されている³³。

よって、西園寺家の中には、脈々と五台山信仰が継承されていたと思われる、北山殿自体を五台山に擬すような構想があり、その中で西園寺は五台山竹林寺に準えられていたのではないかと筆者は考えている。

このような旧西園寺の基調であった阿弥陀浄土信仰は、しかし、義満の取るところではなく、それをはるかに超えるような宗教的シンボルの構築を、ブレンである禅僧などと模索していたに違いない。

実は、義満が披見したであろう『広清涼伝』において、金閣寺について記す前掲の道義伝は、竹林寺において五会念仏を広め浄土信仰を鼓吹した法照の伝記の直前に置かれている（『宋高僧伝』においても隣接して記されている）。

つまり、五台山金閣寺の存在は、西園寺・竹林院・五台山竹林寺というような連想で資料を練れば、すぐに目に付くところにあつたのであり、自己の有に帰した西園寺家の北山殿に乗り込み、この地に旧西園寺の偉容をも凌ぐ宗教空間を演出するにはどうしたらよいか腐心していた義満が、一も二もなく金閣寺のイメージを取り込んだのも、しごく頷けるのである。

周知のごとく、持明院統の根元である後深草院には、公経の孫娘である玄輝門院愔子や東二条院公子が配され、その弟で大覚寺統の根元である龜山天皇には、同じく公経の孫娘である京極院佶子や曾孫である今出川院嬉子が配され、それぞれの皇統を継ぐ天皇が産まれている。後深草院・龜山院の実母もまた、公経の孫娘大宮院佶子であつた。

こうした系譜を考えると、特に京都に住み続けた持明院統の天皇及び上皇たちにとつては、西園寺家の北山殿は母方の実家の別業なのであり、思うに任せない政治上の問題から逃れて、北山の閑静な自然の中で一時の安らぎを味わう空間でもあつた。

義満は、このような持明院系皇統の文字通り「母胎」ともいうべき北山殿西園寺の地と、そこにゆかりを持つ思想や文化をすべて接収し、利用するものは利用し、塗り替えるものは塗り替えて、天皇や上皇を凌ぐ自身の存在を

誇示したと言えよう。

一一一

六 天橋立・西芳寺と金閣寺との類似性

文殊信仰の聖地五台山金閣寺の創建説話が、義満の北山殿金閣造営のモデルになったことは、本稿の考察により立証されたと考える。その中で盛んに行われていた密教修法も、皇帝延命と鎮護国家を主眼とした不空三蔵の思想を体現する五台山金閣寺の性格と矛盾しないことは、既に述べた通りである。

ところで、義満は北山殿において、特に文殊菩薩自体の信仰に力を入れた形跡は見られないが、義満の生涯の行動を通覧すると、興味深い事実が浮かび上がってくる。

その五十一年の生涯を通して、義満は各地の霊地霊場に参詣しており、応永二年の出家後は以前にも増して盛んに各所へ出向いている³⁴。毎年決まって訪れる場所もある中で、中世以来の日本有数の文殊の聖地、丹後天橋立の九世戸文殊堂（智恩寺）を生涯計六度も参詣しているのが注目される³⁵。

その内訳を見ると、二十九歳で初めて参詣し、三十六歳時にも参詣、そして三十八歳時の応永二年六月の出家の直前直後、即ち、五月と九月の両度に渡って九世戸を訪れている。その後、応永四年の北山殿金閣造営を経て、四十八歳と五十歳の時、それぞれ九世戸を再訪している。つまり、金閣造営以前に計四度九世戸を訪れ、出家の年には二度も出向いているのである。

日本三景の一つとして知られる天橋立は、延長三キロにわたる砂州の上に白砂の松林が広がる自然の景勝地であるが、南北に直線状に延びる橋立の両端、即ち、北の端には平安期以来の観音霊場である成相寺（西国三十三所札所）や丹後国一宮である籠神社が位置し、南の端には、鎌倉期以来、九世戸の文殊堂として知られる智恩寺が位置するという、非常に濃密な宗教空間でもあった（雪舟筆「天橋立図」はこれを東側から俯瞰したものである）。

その参詣の実態を示す一例として、十四世紀中頃に橋立を訪れた本願寺の覚如は、まず成相寺のふもとの大谷寺に参詣、そして、成相寺に登山参詣の後、天橋立を歩いて九世戸に近付いている（『慕婦絵詞』第九卷）。つまり、北から南へと「橋」を通って智恩寺に向かったことになる。

興味深いことに、このような参詣の順路、即ち、橋を通って文殊の聖地に至るといふ構図は、本稿で検討したような、五台山金閣寺やそれに基づく義満の北山殿金閣の構造と全く同様なのである。

応永二年の義満の行動をまとめると、五月九世戸参詣、六月出家（法名は道有のまま）、九月九世戸参詣、十一月から十二月にかけて道有から道義に改名、ということになる。筆者の考察では、道義への改名と金閣造営の構想は不即不離の關係にあるから、北山殿金閣造営の構想はこの時固まったのであり、義満が五台山金閣寺の構造を北山殿に取り入れるに際しては、地勢的に類似性を持ち、自身好んで参詣していた九世戸文殊堂からの影響もあつたのではないかと考えられる³⁶。

もう一つ、金閣寺に影響を与えた寺院として古くから名前が挙げられるのが、「苔寺」とも呼ばれる西芳寺である³⁷。夢窓疎石が中興し、その庭園を整備したといふこの寺に、永徳二年（一三八二）十月、当時二十五歳の足利義満は紅葉を目当てに訪れ、夢窓ゆかりの指東庵で終日座禅を行い、夢窓の年譜を借覽して閲読した（『空華日用工夫略集』同年十月十三日条）。

西芳寺には、現在は残されていないが、かつては池の傍らに二層の楼閣があり、その一階部分は瑠璃殿、二階部分は無縫塔と呼ばれ仏舍利を収めていた（群書類従所収『西方寺縁起』）。この楼閣こそ、金閣寺の祖型ではないかというのである。

確かに、池のほとりの舍利殿という結構は一致するものの、金箔に三層という、金閣寺最大の特徴については、西芳寺モデル説では全く説明できない。二層の楼閣という点では、むしろ、旧西園寺時代に築かれ、空中架橋によつ

て金閣寺の二層部分と連結された二階建ての建物、前述した天鏡閣こそ、類似するものと言えよう（瑠璃殿の建築形態は、後に西芳寺をしばしば訪れた足利義政の「銀閣」に継承された）。

ところで、日本側の記録には残されていないが、嘉吉三年（一四四三）朝鮮通信使として来朝した申叔舟（李朝第五代文宗の弟。『海東諸国記』の著者としても知られる）が同年七月九日に西芳寺を訪れた見聞記である「日本栖芳寺遇真記」（『保閑齋集』巻二所収）にのみ、「池之西有瑠璃之閣」。自閣北行。有橋通于西来堂」として、瑠璃殿の北側と西来堂（現在のそれとは全く別の建物で位置も異なる）との間の架橋の存在が記されているのは、本稿の趣旨から見て頗る興味深い。やはりこの瑠璃殿にも橋がかけられていたのである。

よって、池のほとりの舍利殿という配置や架橋という建築構成は、西芳寺を参詣した義満の脳裏に強く印象づけられたに相違ない。しかし義満は、義政のようにそれをそのまま模倣することはしなかった。旧西園寺の天鏡閣を保存することで、西芳寺瑠璃殿のイメージを残しつつ、その南側に、唐代五台山金閣寺に範を取った、天鏡閣よりも高い三層の金色に輝く楼閣を新たに造営し、両者を空中架橋で連結することで、全く新しい義満独自の建築空間を実現したと考えられる。

*1 下坂守氏「金閣寺の歴史」有馬頼底・梅原猛両氏著『新版 古寺巡礼 京都21金閣寺』（平成二〇年、淡交社）九〇頁。引用した部分に続いて、同氏は、寛文四年の『所歴日記』に「俗に金閣寺と云」とあることや、延宝六年の『京童跡追』に「世に金閣寺と云」とあることを引き、「ようやくこの頃から金閣寺の呼称が広く流布するに至っていたことがわかる」とされる。

ただし、「金閣」という名称そのものは、『書言節用集』や『足利治乱記』、『言継卿記』永祿八年四月二日条等にみえ、『きのふはけふの物語』下には、「きんかくじ」とあるから、江戸時代以前、室町後期には既に「金閣」や「金閣寺」の名称が

発生していたと思われる（以上の用例は『標注洛中洛外屏風上杉本』（一九八三年、岩波書店）金閣の条参照）。

*2 『兼宣公記』 応永二九年三月二日条に、足利義持が北野一切経会に参会した後、「鹿苑寺」にも参詣した記事がある（『満濟准后日記』 同日条にも同じ記事あり）。

*3 『臥雲日件録抜尤』 文安五年（一四四八）八月一九日条。

*4 鹿苑寺藏南宋牧谿筆「江天暮雪图」には「道有」印がある。また大徳寺藏南宋牧谿筆「猿图」「鶴图」（国宝）には「天山」印が、同寺藏南宋牧谿筆「観音图」（国宝）には「道有」印がそれぞれ捺されている。

*5 『大日本史料』第七編之二、一四九頁に影印掲載。

*6 白井信義氏『足利義満』（人物叢書、昭和三五年初版、平成四年新装版、吉川弘文館）九九頁。

*7 今谷明氏『室町の王権―足利義満の王権篡奪計画』（中公新書九七八、一九九〇年、中央公論社）一一二頁。

*8 小島毅氏『足利義満―消された日本国王』（光文社新書三三九、二〇〇八年、光文社）一四四頁。

*9 ただし、例えば、この道義の説話の後に両者共に記しているところの、法照による竹林寺開創説話を比較してみると、年号・固有名詞など全く異なる伝承を記しており、この竹林寺説話では、両者が共通の典拠資料に依拠しているとはとても言い難い。よって、道義の金閣寺開創説話についても、両者がそれぞれ異なる資料に基づいて記述している可能性もあることを指摘しておく。

*10 ちなみに、数ある洛中洛外図の中でも描かれた景観年代が最も古い（一五三〇年代とも）とされる「歴博甲本」（町田家旧蔵本）に描かれた金閣寺（札名「六おんいん」）のみ、建物の一層部分に連結した「橋」とその上を歩く僧俗二人が描かれている。

しかし、橋の一方は「隣家」（天鏡閣とは見えない）の土塀に直接連絡しているように見え、不自然である。そもそも実際の「複道」は金閣寺の第二層部分に連絡していた筈であるから、一層部分に連絡しているこの描写は創建時の状況を描いたものであり得ないが、金閣寺造営から百年以上経過してなお、空中を横断する架橋の記憶が人々の間に留まっていたことを示していると言えよう。また、景徐周麟（一四四〇～一五一八）の『翰林葫蘆集』には北山第の様子を「黄金の台を築き鉄鳳上に翔り、拱北楼に架す長虹、空に横わる。」と表現しており、ここでいう「長虹」とは空中架橋の譬喩とみられる。

*11 「十八日、及晩、竹香西堂來、歎々清話、因曰、鹿苑院殿、居北山之時、関東有一老人、聞鹿苑院殿名義満曰、昔北山有

苦行士、名曰義滿、聚石書法華者百部、或依此功德、來生于將相家乎、曾聞此説云々、予謂、雖涉怪誕、而亦未可為一向无此事歟。」

*12 「龍湫周沢は中固という僧が夢に、義滿は、「聖徳太子の再来である」と見たという話を伝えている。」前掲白木信義氏『足利義滿』二一〇頁。また『臥雲日伴録抜尤』などを参照すると、そこには転生の話が多く、当時の禪僧がこの種の話題を好んでいたことがうかがえる。また、転生の例ではないが、義滿がしばしば参詣した北野社についても、天神こと菅原道真が南宋の無準師範に参禅したという、時代的には全く成立するはずのない参禅説話が、「渡唐天神像」として絵画化され広く流布しており、こうした日中を往還する説話が信仰を集めていたのは興味深い。

*13 中田美絵氏「五台山文殊信仰と王権 唐朝代宗期における金閣寺修築の分析を通じて―」（『東方学』一一七号、平成二一年一月）。

*14 足立喜六氏訳注・塩入良道氏補注『入唐求法巡礼行記2』（東洋文庫四四二、一九七〇年・一九八五年、平凡社）六二頁～六五頁。なお、五台山金閣寺については、小野勝年・日比野丈夫両氏『五臺山』（一九四二年、座右宝刊行会、後に『五台山』（東洋文庫五九三、一九九五年、平凡社）として再刊される）を参照。

*15 頼富本宏氏「五台山の文殊信仰」『密教学研究』一八（一九八六年三月）。

*16 千葉照観氏「金閣寺建立に見られる仏頂思想」『天台学报』二八号（一九八五年）。

*17 白井氏前掲書一五六頁。

*18 往時の金閣寺舍利殿各層に安置される仏像群についての根本資料となるものは、『蔭涼軒日録』文明十七年十月十五日条である。この日、鹿苑寺を訪れた足利義政（相公）は、園地や堂舎の由来・変遷について、記主（亀泉集証であろう）と会話を交わしている。第三層（究竟頂）では次のような会話が記録された。

御登究竟頂、相公熟御覽究竟之額曰、額之字如何、以実答、誰筆蹟、答曰、宸翰也、究竟之意如何、最上之儀、又有究竟天云々、入殿、愚曰、曾安阿弥三尊、同有二十五菩薩、今者白雲計相殘也、相公曰、根本為舍利殿乎、愚曰、諾、又指滝頭白之、相公亦指其攸為然、而自閣下、愚前下見台輿之出門還矣。

これによれば、第三層にはかつて阿弥三尊像が安置されていたことがわかるが、それが義滿在世中のことなのかどうか判然としない。義滿の北山殿の前身である西園寺には、『増鏡』に「又、法水院、化水院、無量光院とかやとて、来迎の氣

色、弥陀如来・二十五の菩薩、虚空に現し給へる御姿も待めり」とあるように、来迎印を結んでいたと思われる阿弥陀と二十五菩薩を祀った無量光院なる堂舎があった。この仏像が一時金閣第三層に安置されていた可能性はある。ただし、義満には念仏信仰に傾斜した顕著な形跡は報告されていないことから、阿弥陀像等の安置は義満没後のことではないかと思われ、「根本為舍利殿」の既述を重視して、義満在世中には金閣第三層には仏舎利のみが安置されていたと考えておく。

*19 近時、北山殿における密教修法の目的を、義満の個人的護持に限定して、国家祈祷ではないなどとする論考が出されているが（大田壮一郎氏「足利義満の宗教空間―北山第祈祷の再検討―」『Z E A M I―中世の芸術と文化04 特集足利義満の時代』（二〇〇七年、森話社）所収）、密教的王権解釈は、前述した不空の思想が明らかに示すように、仏教の王即ち世俗の王であり、世俗の王国の安寧が即ち仏法の王国の安寧でもあるから、王に対して「個人的護持」を祈る行為は、王の統治する国の安寧を祈願することと、分ちがたく結びついていると見なさざるを得ない。

よって、自他共に自身を法皇に擬しており、実際にはそれ以上の権力を掌握している義満が北山殿で行う密教修法の目的について、それを「個人的護持」と「国家的祈祷」とに二分して考察しようとする方法自体に、少なくとも義満自身の意図を考えるという意味では、いささか無理があるように見受けられる。

*20 川上貢氏『日本中世住宅の研究（新訂）』（平成一四年、中央公論美術出版）三三五頁。

*21 『後愚昧記』永和三年（一三七七）二月一八日条「申刻許。乾方有炎上。南風猛烈。仙洞（伏見殿御所。号花御所。元季顕卿宅。而故大樹買得之後進上皇也）菊亭。柳原日野大納言宿所。藤中納言宅。其外小屋等又焼失了」。また二年後の記録であるが、『後深心院記』康暦元年（一三七九）七月八日条に「今夜花亭有移徙之儀云々、於造作者。不周備云々」に出る「花亭」の名称も、義満整備後のものではなく、義満以前の名称と川上氏は見ておられる。筆者も『故一品記』に出る西園寺公経の造営した「花亭」との類似から、その見方に同意したい。

*22 前掲川上貢氏『日本中世住宅の研究（新訂）』三三七頁。

*23 「七月四、甲申、或者云、一条入道相国所沙汰渡之唐船帰朝、錢貨十万貫渡之、其上種々珍宝等有之云々、其内、能言鳥一羽、水牛一頭渡之、（後略）」（大日本史料五―十四、四四一頁）。

*24 鋤柄俊夫氏『中世京都の軌跡―道長と義満をつなぐ首都のかたち―』（平成二〇年、雄山閣）一一三頁では、槇島の花亭造営に加えて、他二ヶ所の西園寺家支配を指摘した上で、「これらの状況は、西園寺家が宇治・木津・桂の三川が巨椋池に

注ぐ京の南の玄関口を全て押さえていたことを示すが、それは鎌倉時代に西国から京へ入る物資の多くが、なんらかの形で西園寺家の手を経ていた可能性が高いことを意味する」と述べられる。なお、関口欣也氏『鎌倉の古建築』（二〇〇五年増補版、有隣堂）三五頁では、北条義時から高時まで相続された小町亭（現宝戒寺境内という）について、「この亭は「花亭」と美称されることが多く」としており、「花亭」の名称が武家でも使用されていたことがうかがえる。

*25 こうした考え方の最近の一例として、橋本雄氏『中華幻想―唐物と外交の室町時代史―』（二〇一一年、勉誠出版）一九二頁では、「やはり、室町殿の政權運営・財政面を補完するために、日明貿易が実施され、大量の銅銭（主体は宋銭）がもたらされたと言わねばならぬ」と述べられ、一九三頁では、「いずれにせよ、経済的・文化的な欲求こそが、義満の対明貿易開始の「出発点」であったと結論したい」と述べられる。

*26 赤松俊秀氏「寺史」、鹿苑寺編『鹿苑』（昭和三〇年、金閣鹿苑寺）一八頁。

*27 前掲川上貢氏『日本中世住宅の研究（新訂）』三四五頁～三四六頁。

*28 中世の茶の湯の実態を示す資料として知られる『喫茶往来』に記載されるところの、唐物で満たされた「二階」の「奇殿」は、この天鏡閣がモデルになった可能性があると筆者は考える。

*29 三田村雅子氏『記憶の中の源氏物語』（二〇〇八年、新潮社）及び同書附載の「参考文献書目」参照。

*30 今西祐一郎氏「公季と公経―閑院流藤原氏と『源氏物語』―」『国語国文』五三一―六（一九八四年六月）。後に同氏『源氏物語覚書』（一九九八年、岩波書店）に収録。

*31 河添房江氏『源氏物語と東アジア世界』（NHKブックス一〇九八、二〇〇七年、日本放送出版協会）一三三頁～一三五頁。

*32 桜井英治氏『室町人の精神』（初出は二〇〇一年、後に講談社学術文庫一九二二、二〇〇九年、講談社）一九頁。

*33 拙編『顕意上人全集第一巻 当麻曼荼羅聞書』（二〇〇三年、法蔵館発売）解題参照。

*34 前掲、白井氏『足利義満』一四七頁から一五三頁では、義満の参詣地として、伊勢神宮・石清水社・北野社・日吉社・多武峰・西大寺・園城寺・粉河寺・高野山・篠村八幡・近江無動寺の名前が挙げられている。これらの霊場参詣を白井氏は、「義満の行楽」と総称されているが、勿論、その目的は行楽に留まるものではなく、政治的・経済的・軍事的に様々な目論見を秘めた行動であろう。

